# ５０万都市にふさわしい歴史的景観～旧武家地・二条町界隈に着目して～

芝浦工業大学工学部　准教授
志村　秀明（しむら　ひであき）

## １　はじめに

宇都宮市が市町合併の結果とはいえ，平成19（2007）年３月に北関東初の50万都市になったことは喜ばしいことであり，今後の益々の発展を期待するところである。私が中学・高校と宇都宮市で過ごした20数年前の人口が40万人程であったので，その頃と比べると市域が拡大したとはいえ10万人も人口が増えた訳である。

都市計画研究者の間ではよく知られたことであるが，日本の都市のほとんどが近世城下町都市を起点として形成されている[i]。それらは全て400年以上の歴史をもつ，立派な歴史的都市である。宇都宮市も例外ではなく，城郭の形成は11世紀と言われ，江戸期に奥州街道と日光街道の分岐点となったこともあり，10万石前後の城下町都市として発展した。しかし，明治元年（1868）年の戊辰戦争の戦火と昭和20（1945）年の太平洋戦争の空襲によって城郭と市街地の大半が焼失したため，城下町都市時代の歴史的遺産は少ない。加えて中核都市としての機能を果たすために，街路の新設や拡幅が盛んに行われてきた。結果として建物の更新が加速され，益々歴史的遺産が減少していった。

このような歴史的経緯を踏まえて本稿では，宇都宮市が50万都市にふさわしい歴史をどのように継承し，今後どのようなビジョンと方法でまちづくりを展開すべきか論じてみたい。論じるにあたり，戊辰戦争では戦火を受けたものの，昭和20（1945）年の空襲をほとんど受けていないかつての武家地・二条町界隈（現在の西３丁目付近）に注目する。二条町界隈は空襲を受けなかったこともあり，近代以降の街路整備は局所的にしか行われず，城下町時代の面影を残している。この二条町界隈の特性と街並み景観について丹念に読み解きながら，城下町都市宇都宮市の今後のまちづくりの一方策について論じる。

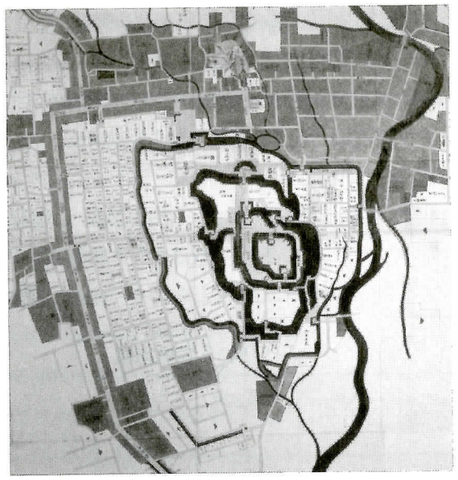

図１　宇都宮城下町絵図（江戸期）[ii]

## ２　城下町宇都宮と武家地二条町

宇都宮の江戸期城下町絵図を図１に示す。江戸期に入り本格的に城下町整備がされる以前に，すでに宇都宮大明神（現在の二荒山神社）とその門前町が存在し，宇都宮氏の館も存在したことから，城郭は南の大地の端に平城として縄張りされた。藩主が蒲生氏，奥平氏，本多氏と短期間で入れ替わったことから，一貫性のある城下町整備はされず，城下町特有の「山あて」や「城あて」[iii]といったビスタを確保した街路やモジュールをもつ町割りは行われていない。一方で，標高の高い上町に町人地，低地の下町に武家地が町割りされるという，一般的な城下町とは逆転したゾーニングとなったことに特徴がある[iv]。

本稿で着目する二条町界隈は城の西側に位置し，武家地の中でも標高の高いところにあり，中級武士が居住していた[v]。町割りは明快であり，外郭の近いところから順に，「一ノ筋」「二ノ筋」「三ノ筋」「四ノ筋」とほぼ直線に南北方向の街路が引かれ，街路の交差部では「クランク（鉤の手）」がいくつか設けられている。四ノ筋の西側に五街道の一つ「日光街道」が走っている。「宇都宮の歴史と文化財」ウェブサイト[vi]によると，一ノ筋から三ノ筋までの各筋沿いには30～40軒の敷地規模500～800坪の武家屋敷が並び，四ノ筋沿いには60軒以上の敷地規模300～400坪程度の武家屋敷が並んでいたようである。

この地区の現在の地図を図２に示す。二条町界隈は，現在の西１，２，３丁目と一条３丁目に該当する。「二条町」という名称は明治期以降に広まった呼称のようであり，現在の住居表示には見られない。しかし通りの名称として「二条町通り」「三条町通り」「四条町通り」とかつての名称が残っている。一条町という名称については現在も「一条」という住居表示で残っているが，一ノ筋という通りは広幅員な幹線道路「国道119号線」に変貌している。

図１の城下町絵図と図２の現在の地図を比較すると，二条町界隈の町割りはほぼ江戸期のままであることが分かる。二ノ筋，三ノ筋，四ノ筋，更に日光街道までもクランク（鉤の手）の形状がそのまま残っている。幹線道路「いちょう通り」が東西に通ったことは大きな変化であるが，それ以外では「もみじ通り」が国道119号線まで通じたのが唯一の変化である。この「もみじ通り」を丹念に見てみると，新しく通じた二ノ筋と一ノ筋の区間のみ街路が少し湾曲している（写真１）ので，城下町時代の街路との違いを読み取ることができる。城郭が消失したことや現在の中心市街地地区の町割りが大きく変貌したことを考えると，江戸期城下町時代の町割りをほぼ現在まで継承している二条町界隈は，宇都宮市にとって歴史的に貴重な地区と言える。

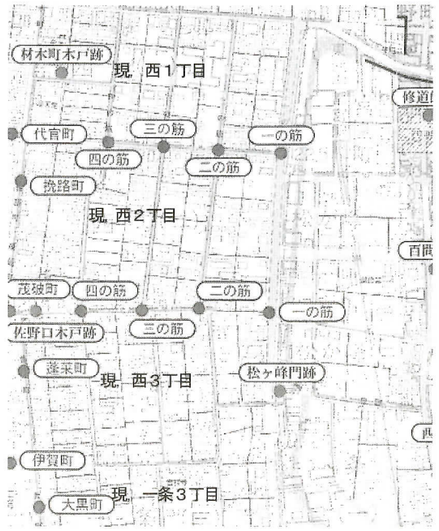


図２　宇都宮市の現在の地図[vii]

写真１　もみじ通り

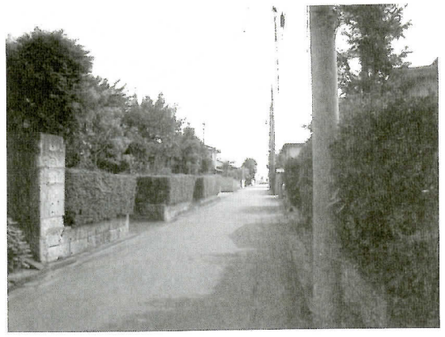

写真２　二条町通り

写真３　民地部分の盛り土

## ３　二条町界隈の７つの景観要素とその価値

ここでは，二条町界隈が江戸期の町割りをほぼ現在まで継承しているという認識を踏まえて，その現在の街並み景観に着目する。景観の可視的な側面が，町の価値を一般社会に認識させやすいことから，景観法の制定に代表されるような景観の重要性と，景観形成の具体的かつ戦略的手法の重要性が増している。はたして二条町界隈は視覚的に認識できる景観として，どれだけの歴史性を継承しているのかを明らかにし，また価値を有しているのか考察していく。

先にも述べたように宇都宮市は昭和 20 (1945) 年の空襲を受けたが，二条町界隈は「もみじ通り」付近等の一部のみを焼失しただけである。そのため町割りだけではなく，戦前の建物や工作物についても比較的多く残っている。

私が現在の二条町界隈を歩き丹念に観察したところ，町割りという都市基盤と上物である建物や工作物から一体的に形成されるこの界隈の街並み景観には，以下の７つの特徴的要素があることを読み取ることができた。

第１の特徴は「街路幅員」である。城下町時代の街路幅員は正確には分かっていないが，３間弱の約 5m であったようである。三ノ筋のように約 6.3m に若干拡幅された街路もあるが，二ノ筋などは現在も約 4.9m の幅しかない（写真 2)。現在でも街路幅員が狭いこととクランクが多いことから，自動車の通過交通が少なくこの界隈は静寂さを保っている。また通行する自動車は徐行することになるので，自然と歩行者優先の街路になっている。皮肉なことに，江戸期の町割りがそのままであることで，今後の我が国のまちづくりで切望されている「安心して歩くことができる人にやさしい街路」がすでに現実化している。

第 2 の特徴は「民地部分の盛り土」である。建物が建つ民地部分が盛り土されることで，街路部分に対して若干高くなっている。場所によって異なるが，平均的に 70cm から 55cm 程高くなっているようである（写真 3)。歴史的な武家屋敷の地盤が，一般的に街路部分より少し高くして街路を見下ろすようになっていることは，知覧麓[viii]などの伝統的建造物群保存地区に指定されている武家屋敷の街並みからも知られている。この民地部分の盛り土は，おそらく江戸期の武家地時代の名残であろう。新しく建設された建物の敷地は，街路とほぼ同じ地盤高となっているところが多いが，この盛り土された敷地は現在でもかなり多く目にすることができる。

写真４　明治後期の三条通り（西３丁目加藤氏所蔵）

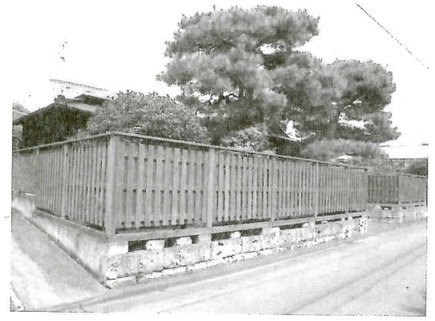

写真５　二条町界隈の板塀

写真６　ドウダンツツジの生け垣

写真７　大谷石を用いた路地

第３の特徴は「大谷石の石垣と生け垣」である。第２の特徴で述べた敷地の盛り土部分の街路と接するところを大谷石の石垣にするのが典型的な造りである。太平洋戦争以前の古い写真を見ると，この石垣の上には板塀を設けることが多かったようである（写真 4)。現在でも写真 5 のように板塀を目にすることができるが，決して多くはない。多いのは生け垣であり，樹種はドウダンツツジであることが多い（写真 6)。やはり知覧麓などの伝統的建造物群保存地区に指定されている武家屋敷の街並みのように，街路から武家屋敷内が見えにくいよう石垣や生け垣を設けることが一般的であったようである。様式は違っているものの，大谷石の石垣と生け垣はやはり江戸期の武家地時代の名残と推測できる。その他にも大谷石の門柱や木製の門などの武家地時代を彷彿とさせるものが多い。

第４の特徴は「大谷石を敷石にした路地」である。城下町時代そのままの町割りのため，街区の大きさは約 100m×200m と大きい。現在の平均宅地面積が 100 坪程度とすると，どうしても街区の中央部分に未接道の宅地ができるため，そのアプローチ路としての路地が形成された訳である。幅 2m ほどの路地であるが，敷石や塀が大谷石であることや生け垣があることなどから，風格と趣のある路地が多い（写真 7)。このような路地は城下町時代のものではないが，この界隈の景観要素として十分に定着し馴染んでいる。

第５の特徴は「木造平家の家屋と洋館」がいくつか見られることである（写真 8)。多くは昭和初期に建設されたものなので武家屋敷ではない。しかし，武家屋敷の記憶が込められた様式の建物であり，現在でも士族の子孫がある程度住んでいることが想像できる。今日では「士族」という階層も廃止されているため「旧士族屋敷」

写真８　木道平屋の家屋

写真９　四条町にある洋館

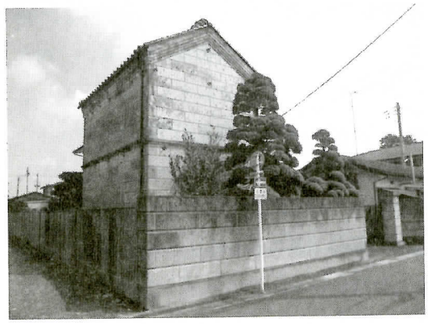

写真10　大谷石造の蔵

写真11　緑豊かな庭と松の木

と呼ぶのが妥当であろうか。また洋館や洋館を併設した家屋がいくつか見られる（写真9）。これらは昭和初期に建設されたもので，その頃に応接間などを洋館とすることが流行したようである。

第6の特徴は「大谷石造の蔵や塀，大谷石張りの家屋」である（写真10）。大谷石造の蔵や倉庫は市内各所に見られるが[ix]，この地区でも多く見ることができる。これらの建設年代は様々であると思われるが，いずれにしても大谷石を使用していることで，宇都宮の特徴的な景観要素となっている。

第7の特徴は「緑豊かな庭と松の木」である（写真11）。現在でも宅地面積が100坪以上と広いところが多いため，庭といった空地が十分に確保されている。江戸期には竹林や茶の木が植えられていたようであるが，現在はそれらを目にすることはできない。しかしそれらに代わって，枝振りの見事な松の木や見事な植栽を目にすることはできる。都市部における緑化の推進が我が国のまちづくりの主要テーマとなっているが，この界隈は十分な緑化の量だけではなく，美しさと風格がある緑化が実現している。

他にも二条町界隈の周辺に目を転じてみると，日光街道沿いには数軒の町家が残り，また多くの寺社が見られる。これは江戸期の城下町のゾーニングの特徴で，城下町の入口に当たる地区を寺町とした。現在でも，報恩寺など風格のある木造の本堂と手入れの行き届いた庭を見ることができる。

二条町界隈はかつての武家地からは大きく変貌はしているが，江戸期の街路構成や街路と街区との関係が継承されている。街並み景観としても，先に挙げたような7つの街並み要素が明確に存在し，「旧士族の屋敷町」と呼べる界隈を現在でも形成している。それは単に歴史的な要



素を継承して宇都宮固有の街並みであるだけではなく，「安心して歩けるまち」や「緑豊かな環境にやさしいまち」といった現在的まちづくりの課題をすでに解決している。

## 4　失われつつある二条町界隈の景観要素

他の多くの都市がそうであるように，二条町においても先に挙げた7つの景観要素は少しずつ失われつつある。その主な原因は，郊外の都市化にともなう中心市街地の空洞化や，二条町界隈における近年の都市計画道路の完成などである。

深刻な問題としてまず，二条町界隈の近隣商店街であった「もみじ通り商店街」と，かつて一ノ筋であった国道119号線沿いの商店街の衰退である。もみじ通りではほとんどが空き店舗となり，新規店舗では居酒屋ばかりが目立つ。商店街の街路灯は管理組合が解散したために点灯せず夜間はこの界隈で最も暗くなってしまっている。これは歴史的街並みと直接は関係しないかもしれないが，生活利便性や安全性を低下させる大きな問題である。

次に空き家や空き地，駐車場の増加である。住み継がれることなく玄関先に雑草が生い茂っている木造平屋の家屋や洋館が目に付く。人が住まなくなった家屋の傷みは早く，取り壊されて空き地になる可能性が高い。すでに空き地や駐車場の数は多く，駐車場の片隅に残っている祠が，かつてそこが旧士族屋敷であったことを物語っている（写真12）。

更に空き地となったところに，新たにアパートやマンション，「ミニ戸建て住宅」[x]が建設されている。アパートやマンションは先に挙げた7つの景観要素に全く馴染まないものであり，また庭や空地をほとんどもたないミニ戸建ても同様である。

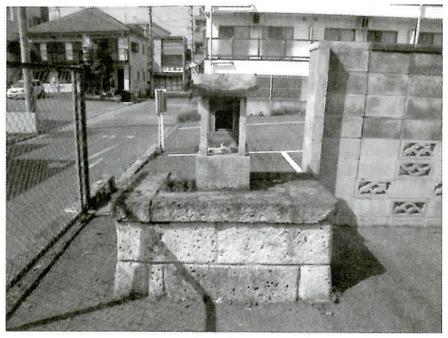

写真12　駐車場の片隅にある祠

## 5　二条町界隈の景観の位置づけと今後の施策

50万都市となった宇都宮市にとっては，新たな都市機能の付加と同様に，いかに都市の歴史的資源を継承して景観として可視的な存在とするかは大きなテーマである。まずは歴史的に培われてきた街並みをどう位置づけるかである。

例えば二条町界隈を江戸の街並みを残した「武家地ではない」と簡単に価値づけるのではなく，多面的な見方からこの界隈を評価し，適切な施策を実施していくべきである。二条町界隈は明治期以降の「旧士族町」であるが，伝統的建造物群保存地区に指定されている地区でも明治期以降に形成された街並みが多いように，それは歴史的な街並みとして十分に評価できる。「二条町」という呼称が明治以降に広まったことは，江戸期の街並みを継承しつつも明治期以降に「旧士族町」として再度街並みが整ったことを裏付けている。また先にも述べたように評価できるのは歴史性だけではなく，「安心して歩けるまち」や「緑豊かな環境にやさしいまち」といった現在的まちづくりの課題をすでに解決

していることである。周辺地区に寺町を抱えていることも，この界隈の大きな利点である。このような評価を踏まえて行政側でまちづくりの施策を準備しつつも，すぐにでも市民参加型のまちづくりデザインゲームによるxiワークショップを実施して，二条町界隈の価値を地域社会の中で共有されるように推進し，市民主導で街並みを維持していく仕組みを確立することが重要である。

本稿では二条町界隈に着目して，50万都市にふさわしい歴史の継承にもとづくまちづくりのビジョンと方法を提示した。この界隈に限らず大切なことは，きめ細かくまちを観察し，評価すべき景観要素を明らかにし，多面的に景観を評価すべきことである。そして現に存在している価値を市民と行政が共に認め，将来にわたって維持していく仕組みを確立することである。

**＜謝辞＞**

本稿の執筆にあたり，二条町在住で元宇都宮高校教諭の小林正治氏の協力を得た。ここに謝意を表す。

**＜注釈及び参考文献＞**

---

i 佐藤滋，志村秀明他「図説城下町都市」鹿島出版会，2002年。
ii「宇都宮御城内外絵図」宇都宮市教育委員会。
iii 街路のアイストップに，城や山が見えることを言う。参考文献i）p26参照。
iv 参考文献i）のpp70〜pp73を参照。
v 塙静夫「宇都宮城と町並みの形成」とちぎ県民カレッジ資料，2007年。
vi http://61.194.63.139/ext/index_j.php
vii「宇都宮文化財マップ - 城下町うつのみやを訪ねて - 」宇都宮市教育委員会。
viii 鹿児島県知覧町に残る武家屋敷を言い，石垣が道路より一段高くなっているのが特徴的である。
ix 岡田雅代「大谷石がもたらす宇都宮の生活景のポテンシャル」，日本建築学会2007年度都市計画部門パネルディスカッション資料「生活景のポテンシャル」，pp101〜pp106。
x 小さく分割された敷地に，連続して建てられた小規模の住宅。
xi 佐藤滋・編著・志村秀明他「まちづくりデザインゲーム」学芸出版社，2005年。